

アントン・フガーの企業と時代 (6)

—— 1520 年代末の業務 ——

松 田 絹

1

ウィーンの御料局文書 Hofkammerarchiv にある帝国公文書 Reichsakte の 1528 年 1 月 4 日付けの文書でカルル 5 世が「陛下に反対するイタリア諸侯に反撃と損害を」加えるため、10 万ドゥカーテンをスペインからドイツに振替えようとした時¹⁾、国王フェルディナントもオルテンブルク伯サラマンカも先ずフガー社を当てにし、他にはヴェルザー一家だけが考慮された。アントンはネーデルラント支店を通じて、この委託を果たしただけでなく、国王のさまざまな借入希望に対しても理解を示した。アントンがインスブルック政府の借款要請に応じた結果は、1528 年に信頼する運送業者を通して 13 回に亘り 11 万 7 千グルデン以上をアウクスブルグからティロールに現送することになった²⁾。1528 年 1 月のハル支店の会計は上オーストリア世襲領の有力者に対する会社の物質的援助を証明している³⁾。これに対し上オーストリア政府はフガー社に対する利払いと償還を 1 月中に実行した。

1) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 114, 454.

2) 「アウクスブルクからティロールに向かう街道ではアントンによって 1527 年頃は殆んど専ら運送人ペーテル・フェント Peter Fend が高価な輸送に使われた。彼は 1528 年 1 月 4 日から 12 月 14 日迄の間、13 回の輸送で現金 117,028 グルデンをアウクスブルクからハルに運んだ。」G. v. Pölnitz, *a. a. O.*, 1. Bd, S. 455.

3) *Ebenda*, S. 455—456.

1528年2月1日オーフェンにおいてフェルディナントの会計長官ハンス・ホフマンはハンガリア鉱山の2年間の賃貸料に相当する41,667ライン・グルデンの受取をフガー社に渡した。更にフェルディナントはサポヤイ・ヤーノシュに対する遠征の金融援助をアントンに求めて、同日会計長官を通じて35,533グルデンの借款を受け、この貸付に対しアントンは返済に充当すべき国王の収入として、24,000グルデンは上及び低ラウズィッツの援助金、11,533グルデンについては低オーストリア御料局の収入を指定された。会社はこの貸付に利子を要求しなかった代り、ティロールで18,000マルクの銀買を認められ、その引渡しは1531年と32年のクリスマスに半分ずつ行われることになり、その際会社はシュヴァーツ造幣局にマルクにつき9ライン・グルデンを支払うものとされた。翌2月2日にフェルディナントはブダからナーポリ王国の彼の徴税官に手紙を送って、アントン及びヒエロニムス・フガーがナーポリの収入に対して41,411ドゥカーテンの指定を受けたことを知らせた。ナーポリの徴税官は2月1日付けの国王の保証状に基づいて、1532年9月1日に11,000ドゥカーテン、同年12月31日に16,500ドゥカーテン、そして残り13,911ドゥカーテンを1533年5月1日にフガー社に支払うことになった。但しこの金についてフガー家は1528年2月3日に国王に対して、同家が以後2年間ノイゾールの鉱山を支障なく経営できた時は、この41,411ドゥカーテンのナーポリの証書は無効なものとして引き渡すことを約束した。

ハンガリアの銅輸送にとって重要なポーランドの関税問題を解決しようとするアントンの努力は、1528年2月2日のポーランド国王ズィグムントのフガー家の関税特権に関する税関吏宛ての指令となって実を結んだ。ズィグムントは続いて2月17日に、クラカウからダンツィヒ迄ヴィスワ Wisła 河の自由航行がフガー社の鉱石と銅に認められたことを文書で証明し、更に2月20日にはペトリカウ Petrikau の国会から国王は規定以上の関税をフガー社の銅輸送から徴収しないように税関吏に厳命した。

1528年2月28日フェルディナントはグランで義弟ラヨシュ2世のフガー社に対する206,741ハンガリア・グルデンの未払債務の支払いを約束し⁴⁾、翌29日にこの負債に対してズィーベンビュルゲン製塩局の収入を指定した⁵⁾。オーフェンでこの製塩局の指定の協定に当たった支配人コンラート・マイヤはアレクスイ・トゥルツォの弱腰に足を引っ張られて憤慨したが⁶⁾、彼の粘り強い交渉は専門家が年収10万グルデンと評価した製塩局収入に関する協定を成立させ⁷⁾、会計長官ホフマンも顧問官レーブレも「ついに親切に」なった⁸⁾。

4) 支配人デルンシュヴァムの作成したフガー社の損害リストは231,741ハンガリア・グルデンとなっていたが、交渉の結果25,000グルデン減額された。G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 459.

5) 「国王の会計役ニクラス・フォン・ゲレント, Niklas v. Gherend, ズィーベンビュルゲン教会の選出人, 世襲領会計長官ハンス・ホフマン及び顧問官ヨハン・レーブレは官廷裁判官アレクスイ・トゥルツォ並びにライムント, アントン及びヒエロニムス・フガーの代理人としてのコンラート・マイヤと, ハンガリアのラヨシュ2世の債務及び彼によって会社が受けた損害(206,741ハンガリア・グルデン)について協定を結んだ。債権者はズィーベンビュルゲンの製塩局の収入から支払われることになった。以後フガーとトゥルツォは製塩局と塩山の各地, また塩が消費され取引されるすべての処に, 国王の役人と並んで自分の人員を置くことができた。彼らは共同で塩を管理し, 会計をつけ, それは御料局長官に検査された。この帳簿でフガー家の商業使用人は彼らの支出, 並びに塩業務の収支について, 別に清算することになっていた。御料局長官は配下の御料局に対して王室の利益を, またフガー及びトゥルツォとの契約の遵守を監視しなくてはならなかった。昔から或いは最近に製塩局や塩倉庫のあった処では, フガー及びトゥルツォの代理人に知らせずに塩取引をしてはならなかった。代理人は労働者の賃銀, 前貸経費及び鉱山支出を支弁しなくてはならなかったが, この際彼らの入手した金は王室の役人に渡すには及ばなかった, というのは役人は塩業務の収支に携わらなかったからだ。企業を運営するためフガー家は『塩取引』の必要に対し, 6年間に5万グルデン迄出す義務を負った。売上はすべての役所で王室の役人がフガー家の代理人と一緒に受取り, フガー家の総支出を差引いた後に初めて, 役人が残額を受け取ることができた。……フガー家は勿論2ヶ月以内に製塩局を

引き受けるかどうかをフェルディナントに通告しなくてはならなかった。……フガー家が『平穩無事に所有して、作業とその採掘を開始し』その他の条件も守られた時は、同家は国王に以降4か月間、1万グルデンずつ計4万グルデンを貸すことになった。清算に際してフガーは、毎年先ず製塩業の支出を自分が受取る権利を有し、また国王は内外の敵の軍事行動により損害が生じた時は、それに対し補償しなくてはならなかった。更に商会は剰余から、同家の認めた債権の返済のために毎年28,000グルデンを控除できた。残りから4万グルデンの上記貸付が第一に返済され、しかも最初の年に3万グルデン、翌年に残り1/4ということになった。王室及びフガー家の公私の役人及び使用人の費用は、特別支出が考慮されず、製塩局が支弁することとされた。」G. v. Pölnitz, *a. a. O.*, Bd. 1, S. 459–460.

6) 1538年3月1日にマイヤはオーフェンの交渉についてアントンに報告し、トゥルツォが「この件で彼は悲しむだけで」役に立たず、「全く彼のやることは本当に緩慢で、頑固で、この態度は本当に腹が立ちます；というのは国王に気に入ってはほしいし、また同じく貴下にもと思っていますが、それは辻褄の合わぬことです」と述べた。*Ebenda*, S. 119.

7) マイヤの意見ではズィーベンビュルゲンの塩業務は、平和が締結されればハンガリアで見つけられる「最良で最も良心的、また最も充分な指定」であった。オーストリア軍がサポヤイを破れば、塩産出が始まり8年以内に一切の負債は返済できよう。始動資金は2万ハンガリア・グルデンで足りると彼は考えた。*Ebenda*, S. 461.

8) *Ebenda*, S. 119.

支配人マイヤはオーフェンとグランにおける当局との交渉でハンガリア鑄貨の今後の対策についても相談した。フガー社にとってヴィーン又はブレスラウ経由で毎年約8千マルクの銀を供給することは、同社のシュレーズィエンとティロールの銀に対する有利な販路を確保することを意味した。造幣局の立地としては交通の便と戦争の際の安全の点からオーフェンよりもクレムニッツが適していたので、会社はオーフェンに代理人を置いて、悪貨を両替して改鑄のためクレムニッツに送った。ハンガリアの牛迫いはドイツ鑄貨をヴィーンでフガー社に渡してオーフェンでハンガリア鑄貨で支払を受けた。マイヤはハンガリア人の国民感情を考慮して刻印の際はアレクシ・トゥル

ツォを造幣権所有者として利用した。ハンガリアの造幣収益金はズィーベンビュルゲン製塩業の運営資金としても必要であった。アントンはこの機会に曾てのトゥルツォ家との共同事業に対する両家の持分を文書で詳細に規定した。

2

1528年1月にザクセン公ゲオルクの顧問官オトー・フォン・パック Otto von Pack は、国王フェルディナントがブレスラウで新教徒を弾圧するため、マインツ及びブランデンブルク両選帝侯、ザルツブルク大司教、ヴェルツブルク Würzburg 及びバンベルク両司教及びザクセン公ゲオルクと旧教同盟を結んで、ヘセン Hessen 方伯フィリップとザクセン選帝侯ヨハンを追放しようとしているという怪情報をヘセン方伯に流した。この所謂「パックの策謀」 „die Packschen Händel“ に乗せられた方伯とザクセン選帝侯は3月8日に軍事同盟を結んで先手を打とうとし、フィリップ方伯はフランス国王、ズィーベンビュルゲン侯サポヤイ及びデンマルク国王とも連絡を取った。しかしパックの文書が偽りであったことが判明し、ザクセン選帝侯が大事を取ったので、フィリップ方伯はプアルツ Pfalz 選帝侯ルートヴィヒの平和仲介で、ヴェルツブルクとバンベルクからは無駄に使った武装費用の補償と、マインツからはヘセンの宗教裁判権の放棄を受けることで納まった¹⁾。しかしこれはアントンにとって旧教勢力に対する危険を示した事件であった。

1) K. Brandi, *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation und Gegenreformation*, 3. Aufl., 1942, S. 181–182 ; W. P. Fuchs, *Gebhardt Handbuch der deutschen Geschichte*, Bd., 2., S. 89.

1528年4月23日にヴォルフ・ハラー Wolf Haller とクリストフ・ミュエリヒはフガー社の代表としてマドリーでスペイン王室と契約を結び、同社は3

万ドゥカーテンの手形を渡し、これはフェルディナントの代理人によってアウクスブルク、コンスタンツ又はインスブルックにおいて受取られることになった。これに対しフェルディナントは6月8日にフガー家に対しシュヴァーベンのミックハウゼン Mickhausen の城、村及び領主権を売却し、オーベルキルヒベルク Oberkirchberg の狩猟権を承認した。

1528年3月9日に国王フェルディナントはヴァイセンホルンの市長と参事会に、シュヴァーベン同盟が新教徒に対する警告のためこの町を、ウルム周辺で捕えられた再洗礼派の流血判決の「記念地」„Malstatt“に指定したことを伝えた²⁾。しかし再洗礼派の活動は止まず、復活祭には信徒の大群がヴァイセンホルンで集会を開こうとした。市参事会は彼らを捕えたが、騒ぎを恐れて穏便な処分と主謀者の追放で済ませた。そのためアウクスブルクの近くには逃亡して来た再洗礼派が増大したので、シュヴァーベン同盟は断乎たる処置に訴え、主謀者のアイテル・ハンス・ランゲンマンテル Eitel Hans Langenmantel を捕えてヴァイセンホルンの牢獄に投じた。フガー社がティロールのハル支店長ハンス・ヘールをヴァイセンホルンの支店長に転任させたのは、バルヒェント業務の推進と並んで、この宗教問題と関連していたろう。福音派の信仰に好意的であったヘールはライムント・フガーの内意を受けてランゲンマンテルを拷問にかけないために尽力した。5月8日に逮捕者たちは、教会に戻るなら処罰は軽減するが、さもない時は男子は打ち首、女子は溺死させると通告された。ヘールの説得にも拘わらず彼らは改宗を肯んぜず、5月12日ランゲンマンテルは信者と共に判決通り処刑され、アントンは同じアウクスブルクの都市貴族を彼の領内で殺させることになった。

2) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 125, 468.

ライムント、アントン及びヒエロニムス・フガーは、支配人マイヤがアレクスイ・トゥルツォと共に国王フェルディナントと結んだ、ズィーベンビュ

ルゲンの塩業による債務及び損害賠償の支払に関する上述の契約を承認した旨を4月14日にフェルディナントに伝えたが³⁾、6月10日に繰返して国王に返済の支払を請求した。更に6月26日には会社は王室に対し、南イタリアの返済がナポリの戦争のため48,000ドゥカーテンの支払が滞っていることを指摘して、支配人ゲオルク・ヘルマンを国王の宮廷に派遣して6万ドゥカーテンの総債権に対する確実な担保を交渉させたが、直ぐに埒は明かなかった。逆に国王の顧問ヨハン・ツォットは6月初めから、イタリアの皇帝軍に対する金融援助を受けるためにアウクスブルクで交渉を始めていた。ツォットは6月半ば以来アントン・フガー及びバルトロメウス・ヴェルザーと、上イタリアに在る軍隊の給与支払に必要な5万ドゥカーテンの振替について相談した。だがツォットはティロール世襲領の担保で国王のためにも金を借りなくてはならなかったもので、交渉は難行した。

3) 上述, 99~100 頁.

イタリア戦線の皇帝軍を至急6千の歩兵で強化する必要に迫られた国王フェルディナントは1528年7月21日プラハから次のような指令を出した。フガー及びヴェルザーに皇帝の手形が無くても5万ドゥカーテンを、シュヴァーベン同盟の指導者ゲオルク・トルフゼス・フォン・ヴァルトブルク Georg Truchseß von Waldburg とツォットに渡させよと。だが7月末に皇帝の手形が届いたので、ツォットはこの5万ドゥカーテンの手形を7月31日にインスブルックからアウクスブルクに持って行ってフガーとヴェルザーに引受けさせたが、翌日彼は皇帝に次のように問合わせなくてはならなかった。手形は受け取ったが、アウクスブルクの諸銀行に契約通り支払うと21,000グルデンも減ってしまい、上イタリアの戦場に十分な効果を生じないことになるので、如何致したものかと。とにかくツォットはフガー及びヴェルザーから更に2万ドゥカーテンの融通を受けるために交渉を続けた。手形の届いた

ことを知ったフェルディナントはオルテンブルクに領証書を持たせてアウクスブルクに派遣し、5万ドゥカーテンの支払を両社に催促させた。オルテンブルクの顔で8月半ばにフガー社との間に融資の協定が成立した⁴⁾。

- 4) 「オルテンブルクの権威でもって、やっと1528年8月半ばに少なくともさまざまな点で、フガーとの協定の締結に達したが、この際アントンは大きな頑固さを示した。彼は以後4年間タルフィス Tarvis[税関]の総収入を要求し、更にエンゲルハルトツェルとライバハの付加税とアイゼンエルツ Eisenerz の2つの管区を指示されて以前に貸付けられた48,000グルデンの返済後この担保の2年延長を求めた。フガー家を保証するため、同じ収入に国王に対するその債権が約束されていたヒルデスハイム Hildesheim の司教とヨハン・フェルンベルガー Johann Fernberger は別途返済されることになった、ナーポリの債権の取極は、軍事情勢の許した時に行われることになった。フガー家はその1万グルデンの貸付を協定通りスペインの手形で受取って良いと思ったが、スペインの収入で更に1万グルデン貸す積りであった。フガーがモントフォルト Montfort 伯に支払わなくてはならなかった1万ドゥカーテンに1万グルデン債権の取極が加えられた場合には、彼はそれを承知した。更に彼はブレスラウ市による負債の1年以内の返済を8%の利子で要求した。フガー支配人コンラート・マイヤがハンガリア当局の約束に反して彼の24,000グルデンの貸付を税収入から帰して貰わなかったので、フガーはズィーベンビュルゲン塩鉱業の引渡しにも拘らず、約束した4万ハンガリア・グルデンの支払を拒み、一方国王は先ずこの金を受け取った後に、その24,000ハンガリア・グルデンについては彼の世襲領の担保をフガー家に認めようと思った。アントンは最悪の場合には24,000ハンガリア・グルデンを4万グルデンに加える積りでいて、その旨の国王の指令をハンガリアの彼の支配人ヤーコプ・ヒューンラインに渡してほしいと願った。条件はオルテンブルクに非常に難しかったので、彼は他に仕様がなくて会計長官ホフマンにそれを呑むように勧めて、フガーが皇帝の手形の支払の際に彼[フガー]に借りているあの1万グルデンを留保することを阻止しようとした。」 G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 474-475.

しかしこの5万グルデンの手形の資金が直ちにイタリア戦線に送られなかったことは、イタリアの皇帝軍の指揮官ブラウンシュヴァイク公小ハインリヒ Herzog Heinrich der Jüngere von Braunschweig のロンバルディーア

撤退となった。

3

1528年3月にトゥヒェル Tucher 家の支配人はリヨン Lyon から、南フランスではヘッヒシュテターの手形で金を貸す者はいないとニュルンベルクに報告した¹⁾。マンリヒ Manlich 家の代理人が仕掛けたものと思われるこの危機を乗り越えたヨアヒム・ヘッシュテターは1528年7月にイギリスに赴いて、グresham Gresham 家に水銀在庫を投売りして融資を受けようとした。しかしグresham家は彼がネーデルラントで破産したと見做したので、これはヘッヒシュテター家の信用失墜を加速する結果となった。アントンは6月初めに自分でヘッヒシュテター家の財産状態を調査した²⁾。同家の記録によると水銀及び辰砂の在庫が計166,687グルデンあり、これに対し104,687グルデンの債務があった。その差額62,000グルデンから未確定の債権、債務を差引いて20,706グルデンの剰余が生じた。同家の業務全体のバランスは661,814グルデンの資産に対し、436,108グルデンの負債となっていた。しかしこれらの記録を調べたアントンは7月8日にこの紛飾決算を見破って「だが私はそれには不良債務がもっと多くあると信ずる」と記した³⁾。

- 1) 「何故ならすでに1528年3月にトゥヒェル家の支配人はリヨンから報告している、
『ヘッヒシュテター家はこの手形(=大市支払)で殆んど信用を失ったので、誰も同家に手形で金を出そうとしない。マンリヒ家の使用人は同家にここで大きな損害を与えた筈で、同家のことを云いふらして手形を全然引き受けようとしなかった。仲買人は互いに同家を警戒するに至った。同家はここで26,000クローネンの決済をしなくてはならなかったが、無担保で調達したのは6,000クローネンに過ぎなかった。結局同家はハンス・ヴェルザーとナルスイス・ラウギンガーの許で、13,000クローネンの手形について裏書きして貰うことが出来ただけだった。更にマティアス・レム Mathias Rem——彼は同家のリヨン支配人であった——は彼の主人ヘッシュテター家がリヨンに有する計14,000グルデンの水銀、辰砂及び銅の全財産をヴォルフ・ハルシュトルファー Wolff Harstorfer に

譲ることを生命財産を賭けて約束した。これが成功しなかったなら、同家は破滅したに違いない；何故なら同家は手形はすべて引受であったからだ。』R. Ehrenberg. *Das Zeitalter der Fugger*, I, S, 216.

- 2) アントンが調べたヘッヒシュテター家の会計記録は「水銀及び辰砂の抜粋」、「旧取引の決算」及び「公示された金額」であった。G.v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1.Bd., S. 477.
- 3) 「古い遺言規定が記している富豪ヤーコプの時代からのしきたりに従って、商会の殆んどすべての重要な会計と通信は社主自身によって検査されたり処理されたりした。それゆえアントンはヘッヒシュテターの勘定に関する彼の印象を3頁の覚え書きに飾らずにまとめた。挙げられた数字は全く不正確であった。建物、在庫及び債権は、穏やかに云えば、過大評価された。もう一つの不正確は、貸借対照表が例えばロンドンの毛織物や水銀及び錫について希望する売上げを挙げて、仕入額や平均値で計上されていないことに見られた。こういう紛飾をアンブロジウスは債権者及び債務者の列挙の際に行なった。彼は確かに負債を必ずしも隠さなかった。けれども読む者の無邪気なことを訳もなく信じて、実状は非常に歪曲されたので、アントンは記した：『だが私は、それには不良債務がもっと多くあると信ずる。』」G.v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 133.

ニュルンベルクの都市貴族の出でアントウェルペンで活躍していたラーツァルス・トゥヒェルを信用していなかった老アンブロジウス・ヘッヒシュテターは、彼らの間の対立が同家の信用を傷つけた噂の元であることは知っていたが、その背後にトゥヒェルが仲買人として働いていたフガー家があることに気がつかなかった。それゆえ彼は紛飾した貸借対照表をアントンに示して、うまく誤魔化して援助を受けようとしたのだが、結果は彼の立場を一層悪化させることになった。1528年7月21日にフェルディナントの会計局長がヘッヒシュテターのティロールの銀産出のフガー及びヴェルザーに対する譲渡を承認した時、王室はヘッヒシュテターの企業の実状も、アントンの真意も気づかなかった。従って8月にアンブロジウス・ヘッヒシュテターが乾坤一擲の大博打としてブリュッセル宮廷に20万カルロス・グルデンの大口貸付を申し出た時、それは疑念を持たれずに契約の成立となった。このゲルデルン Geldernにある皇帝軍に対する融資は現金でなく商品で提供され

たので、ネーデルラント政府は 350,700 ポンドの水銀と 60,760 ポンドの辰砂の換金を引受けることになった。ところがこの商品の売却を委託されたラーツァルス・トゥヒェルは、市況が悪くて 20 万グルデンの代りに 126,000 グルデンにしか売れず、代金は数月の分割払いで入金すると報告したから、政府は 74,000 グルデンの損をすることになったが、軍隊を確保するため差し迫って金を必要とした皇帝によって承認された。しかしトゥヒェルはヘッヒシュテター家のネーデルラントにおけるこの水銀販売の失敗を吹聴したので、同家に対する疑惑はますます増大した。当然同家の債権者たちは一斉に返済を要求したが、彼らの顔振れを見るとトゥルツォ、アルツト、レーリンガー、グランダール、マンリヒ、ヴェルザー、ランゲンマンテル及びアードラーは、すべてフガー家の仲間であった。アウクスブルクの老アンブロジウス・ヘッヒシュテター、アントウェルペンの小アンブロジウス、ヴェネーツィアのドイツ人商館のヨーゼフ・ヘッヒシュテターに対して彼らの商会は破産するのではないかという疑念が増大した時、老アンブロジウスは「愛する親類の方」„Lieber Herr Vetter“であるアントンに助けを求め⁴⁾、アントンは同家の債権者たちから「中立の」„neutrale“立合人として現われて調停の労を取ったが⁵⁾、それは見せかけの援助に過ぎなかった。

4) G. v. Pölnitz, *Die Fugger*, S. 116

5) G. Ogger, *Kauf dir einen Kaiser*, S. 289

ペルニッツによるとヘッヒシュテター家の危機とズィーベンビュルゲン製塩業へのフガー社の進出には「目に見えぬ関連」„unsichtbare Zusammenhänge“が考えられるとする⁶⁾。ズィーベンビュルゲンの製塩業を指揮するためにハンス・デルンシュヴァムが 1528 年 8 月初め以来トルンベルク Tornberg に着任していたが、国王の命令でここの製塩局の管理に当たったマルクス・ペンプフリンガー Marx Pempflinger は労働者を四散させてしまうよう

な無能ぶりを示しただけでなく、国王から受ける支度金が乏しかったので、会社は彼の馬の費用を引き受けなくてはならなかった。デルンシュヴァムは坑夫を引き留めるためクラウゼンブルグ Klausenburg から織物を取り寄せて彼らに分けてやった。着任したデルンシュヴァムが現地で見たことは、「部屋は荒れ果てて必要なものは何もない」し、在庫の塩の質は悪くて「それを売って金にするには未だもっと時間がかかるだろう」から、「どうして金を作れば良いか全く見当がつかない」と、着任して2週間後の8月28日にオーフェン支店長ヤーコプ・ヒューンラインに宛てて報告した⁷⁾。トルンベルクには「ズィーベンビュゲン全体の中で最良の塩山」があつて「良い、堅い、白い塩」を供給するが、坑道は浸水し、施設は腐朽し、貯蔵庫がないので、採掘された塩は「野天で雨曝し」にされていたので「しばしば多くの塩が駄目になり、崩れて、雨で流されたので大損が生じた。』⁸⁾

6) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 134-135.

7) G. v. Pölnitz, *a. a. O.*, 1. Bd., S. 135.

8) *Ebenda*, S. 136.

しかし最大の難問は労務管理にあった。「彼らは誰もうまくやれないようになっている。国者も他処者も皆、我儘で、悪い、貧しい民衆だ。」デルンシュヴァムの意見では、彼らは余りに困窮しているので世帯が持てないから、少し許り塩を掘ると直ぐ現金を要求して、「直ぐさま飲むのだ。誰も週給を希望しない、だからそうになっているのだ。」しっかりした大工がいないので労働者は自分の道具を使用したか、「彼らは坑内で何かが必要な時は、いい加減な修理をする。」労働者がストを始めても、この支配人は「双方が悪い。労働者は我儘だ」し「役人は彼らを乱暴に扱う」からだと判定した。確かに坑夫の再教育が必要と思われた、「何故なら彼らは何の手仕事もできないし生業もない。在るのは怠惰、無性そして野蛮だ。」こういう労働事情を改善するには、実情

に応わしい、辛抱強い対策が必要であった。「ノイゾールでも同様に我儘を改める」ことが出来たのだから見込みはあった。只「直ぐそうはならない、塩の在庫が充分在るようになり、役人の一切のやり方を知る迄には、一年以上ではなくても、一年はかかる」とデルンシュヴァムは考えた。国も「多くの酷吏を罷免する」ことを会社に望んだ⁹⁾。

9) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S.137-139

アントンはズイーベンビュルゲンの新しい企業の開拓に関し、デルンシュヴァムに大きな自由裁量を与え、唯オーフェン支店長ヒューンラインの同意を受けるように命じた。デルンシュヴァムはオーフェンからアントンの指令を受け取り、ヒューラインは情報をアウクスブルク本店に送った。デルンシュヴァムの最初に着手した仕事は人材の確保であった。先ず有能な会計係が任命され、着服や不正行為は影をひそめた。この支店には少なくとも7人のドイツ語、ハンガリア話及びワラキア語の他にポーランド語とラテン語を解する使用人が必要であった。支店長デルンシュヴァム自身ハンガリアの衣服をまとった、「何故ならわれわれは純粋なハンガリア人の間にいる」からだ¹⁰⁾。

10) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S.140.

1528年8月22日にアントンは国王フェルディナントに書翰を送り、支配人コンラート・マイヤが国王に2万グルデンを貸したことを指摘して、今直ぐ約束の4万グルデンを支払うのは不可能なことを強調し、それを部下に強要するのは「甚だ迷惑」と述べた¹¹⁾。勿論アントンは約束した4万グルデンを支払う積りではいたが、王室の役人が会社には圧力をかけるのは許せなかった。オーフェン支店長ヒューンラインも「国に戦争のある間は平和に商売を営めず、金を安全に運ぶことはできない」ことを知っていたから、約束

した金を国王に対して支払うのを惜しむ積りはなかったが、そのためには国が鉱山業の育成を保証することが先決問題であるとした¹²⁾。ヒューンラインは8月22日にオーフェンからデルンシュヴァムに宛てて、こう書き送った。「愛するハンス・デルンシュヴァムよ、貴下はどれだけ金を持っているかに従って仕事をしなくてはならないだろうし、国に平和が来る迄は金を出さない方が主人たちのためになる。」¹³⁾ズィーベンビュルゲン製塩業の再編成に直ちに取りかかる積りでいたデルンシュヴァムに比べて、アウクスブルク本店もオーフェン支店も事態を慎重に判断したので、デルンシュヴァムの熱意を抑えるに努めた。ペルニッツは「その際彼〔デルンシュヴァム〕にはアントンの決定を規定したあの背景は隠されたに違いなかった。決定を下したのは依然としてヘッヒシュテター事件であった」とする¹⁴⁾。

11) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 141, 488.

12) G. v. Pölnitz, *a. a. O.*, 1. Bd., S. 142.

13) *Ebenda*, S. 142, 489.

14) *Ebenda*. S. 143.

4

ヘッヒシュテター家についてエーレンベルクは次のように述べている。「ヘッヒシュテター家は当時最も憎まれた独占家であった。噂によると同家は預金として小額の資金を集めて、これを個々の商品の市場を支配するために使った。クレメンス・ゼンダーはこれについて以下の如く報告している：『アンブロジウス・ヘッヒシュテターに対して諸侯、伯、貴族、市民、農民、下男及び下女が持っている金を預けて、彼はこれに対し彼らに5分を支払った。会社に預ける10グルデン以上を持たなかった多くの農僕は共同で預けて安全だと考えた。だから彼は暫く百万グルデンの利子を払った筈だ。だが世間では、彼はよく嘘をつくという噂だった。彼がそれだけの金の利子を払っ

たことを知る者はいなかった。彼は良いキリスト教徒でルター派には大反対だった。だが彼はその商売で、卸売りの世界市場商品のみでなく小さな商品でも屢々貧民を抑圧した。』¹⁾1517年にヘッヒシュテター社の曾ての株主バルトロメウス・レムが利益の配分を回ってアンブロズィウス・ヘッヒシュテターに訴訟を起こした際、レムの主張によると6年間毎年平均500—600%の利益を挙げた筈だとされた。この件は富豪ヤーコプが仲裁して解決したが、大会社の暴利を暴露した事件として評判を呼び、「ユダヤ人の儲けの7倍」以上になる「商人の巨万の利益」が噂となった²⁾。

1) R. Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger*, I. S. 212-213.

2) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S.128.

ヘッヒシュテター社の経営状態についてアウクスブルクでは色々取沙汰された。香料船の損害、ネーデルラントとシュヴァーベンを結ぶ街道での追剥による貨物の損害、打ち首になったアイテル・ハンス・ランゲンマンテルの娘と結婚したヨアヒム・パウムガルトナーや婿のフランツ・パウムガルトナーの浪費などが噂されたが、決定的な原因はフェルディナントを信じて老アンブロズィウスが強行した融資の破綻にあった。1528年10月に先ずヴェルザー家がヘッヒシュテター社にそのティロール銀債権の譲渡を迫り、ティロール政府は10月6日にハル造幣局長ハンス・ベーハイムに対して、ヘッヒシュテター社の支配人リーンハルト・ルプ Lienhart Rupp の要請によって同社の銀をヴェルザー社に9,525マルク、フガー社に2,578マルク、計12,103マルク譲渡した旨を通告した。10月22日に支配人マイヤがアントウェルペンからヘッヒシュテター家の件でアントンに出した報告で「私は貴下から長い間命令を受けていなかったのだから余り立ち入らなかったと記しているのだから、この頃明白な指示が与えられたらしい³⁾。当時ネーデルラント政府の貨幣業務を殆んど独占的に支配していたゲルハルト・シュテルケ Gerhard

Stercke がアントウェルペンの貸付市場でヘッヒシュテターの業務をこの間に自分のものにした。シュテルケは直接又はラーツァルス・トゥヒェルを通じてフガー社に引き入れられたものと推測されるが、フガー家は表には現われなかった。老アンブロズィウス・ヘッヒシュテターの援助要請に応じてフガー社は11月26日に同家に23,141グルデンを前貸したが、それはヘッヒシュテター家をもっと追い込むためであった。フガー社は20万グルデンの同家の約束手形、額面5万カロルス・グルデンの明礬関税収入の債務証書、15,000グルデンの穀物関税の同様な証書、7,500グルデンのフランデルン Flanders 収税局長の債務証書、更に同額の宮廷の領収書を手中にした。老アンブロズィウスがネーデルラント宮廷に対して承認して、後にアントンに譲渡した20万グルデンの貸付については、マイヤが差し当たり8万グルデンを担保で受取り、後に更に5万グルデンの債権を受取ったので、未済は7万グルデンとなったが、アントンのマイヤに対する指令が明白でなかったので、マイヤはこの残額の帰属についてはっきりした態度を取らなかった。そこで小アンブロズィウスはこの7万グルデンを「彼が去る前に別途に取引して他の者に手渡した。」⁴⁾ こういうやり方は破産しかかっている会社に対するアントンの態度を当然硬化させた。この商会は遅くも1528年秋以降フガーの支配下に陥ったが、アントンは匿名を守るために引き続いてコンラート・マイヤを通して交渉させた。マイヤは「神の思召しで、ここ2つの大市は債権者をこうして満足させて、やって行けるでしょう。だが私は遠からずそうなること〔破産〕を本当に案じています」と記したが、アントンはこの時点で起こると工合の悪い同家の崩壊を引き延ばしたに過ぎなかった⁵⁾。ヘッヒシュテター家の最後の優良な債権を握るまでは、同家の破産を引き延ばすことが、アントンにとっては必要であったのである。

3) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 489.

4) G. v. Pölnitz, *a. a. O.*, S. 145.

5) *Ebenda*, S.145-146.

ズィーベンビュルゲンでは支配人デルンシュヴァムが塩生産、街道及び水路、貴族、僧侶及び官吏の動向について絶えず情報の収集に努め、1528年12月16日にオーフェン支店長ヒューンラインに宛てて詳細な報告をクラウゼンブルクから送った。アントンは「今のところは目をつぶっていなくてはならない」と判断し、「君たちは何と云ってもハンガリアの慣習を知っている」と励まし、「君たちは市場で学んだように行ふべきだ」と指令した⁵⁾。デルンシュヴァムは手持ちの現金で持ちこたえなくてはならなかった。アウクスブルクからの送金は考えられなかった。会社の流動資金はヘッヒシュテター一家の残存資産の取得や、ハープスブルク家に対する緊急の貸付のために必要であった。

6) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 151.

1529年2月9日付けで国王フェルディナントはフガー家と老ハンス・パウムガルトナーがトルコ遠征のために、それぞれ24,000グルデンを彼に貸したことを認めた。その返済に充てるものとして国王はザンクト・ヨアヒムスタール St. Joachimsthal の鉱山、上納金及び造幣局からの収入を指定し⁷⁾、1529年5月1日から両社は毎月2,080ライン・グルデンをザンクト・ヨアヒムスタール造幣局から受取ることになった。同時に両社は国王とザンクト・ヨアヒムスタールの銀について24,000ニュルンベルク・マルクの銀買契約を結んだ⁸⁾。更に2月17日には国王は別口のフガー社の33,000ライン・グルデンの債権に対しシュレーズィエンの関税及びビール税を指定した⁹⁾。

7) 但し「Burian 及び von Schlick 家のヒエロニムス及びローレンツ兄弟並びにその従兄弟カスパー及びハインリヒ・フォン・シュリックとの国王の契約(1528年9月13日)

によって、この収入の中から、1528年12月15日の契約でザクセン公ゲオルクに渡すべき支払を差引いて未だ国王に残っていた限り」が指定された。G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S.493.

8) 「両家が金属を輸出するか、現地で鑄貨にするかは、任意とされた。16,000 マルク迄両家は手数料優遇を認められた。鑄貨は金属引渡し後、遅くも10日以内に両家に渡される筈であった。この責任を負ったのは、共にザンクト・ヨアヒムスタールにあった造幣局長 Ulrich Gebhart と十分の一税徴収人 Gregor Schutz であった。」G. v. Pölnitz, *a. a. O.*, 1. Bd., S. 493.

9) これについてフェルディナントは「ブレスラウ又はゲルリッツ Görlitz 及びバウツェンの市長及び参事会のフガーに対する共同の保証を得るように彼が努めるべきことを約束した。」*Ebenda*, S. 493.

老アンブロジウス・ヘッヒシュテターは妻を通してアントンの妻アンナ・レーリンガーに近かったが、1529年3月2日にアウクスブルクの近郊のブルクヴァルデン Burgwalden の城と領地をフガー家に抵当に入れなくてはならなかった。ヘッヒシュテター家のこの財産が11万グルデンという実際の価値よりもずっと低く評価されたことは、約三百人の債権者たちの間に動揺を生ずることになり、彼らは早急の支払を要求して騒ぎ出した。アントンがヘッヒシュテター家の銀及び類似の有価物に関する最良の契約を、次ぎつぎと計画的に譲渡を受けたことが間もなく判明した。4月24日に小アンブロジウス・ヘッヒシュテターはアントンに手紙を送って「君がわれわれを倒さぬように全能の神に望む」と記して援助を要請し、「この苦境からわれわれを救ってくれ！」と歎願した¹⁰⁾この痛ましい叫びもアントンを動かさなかったのは、ヘッヒシュテター家が他の商標を付けた梱包で、その最後の財産をアウクスブルクから発送したことで説明される。ヘッヒシュテター社は5月7日付けでフガー社にそのイエンバハの精錬所、熔鉱炉、木炭倉庫及び付属品を1,000グルデンで、鉱石、木材及び木炭の在庫を1,500グルデンで売却した。同時に冶金用具、車馬その他が250グルデンで、またシュヴァーツの

家屋、庭園及び鉱石箱が付属品とも 600 グルデンと一緒に売却された。6 月 10 日に国王フェルディナントはウィーンで大部分ヘッヒシュテター社のものであったイドリア鉱山の水銀収入 57,500 グルデンが同社からフガー社に譲渡されたことを承認した。6 月 16 日にはインスブルック近郊及びシュヴァーツの舟着場にあるヘッヒシュテター家の不動産がフガー社に売却された。ヨアヒム・ヘッヒシュテターは逃亡したがアンブロジウス及びヨーゼフ・ヘッヒシュテターの 2 人は、債権者を安心させるため 8 月に拘禁された。

10) G. v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 159.

5

皇帝マクシミリアーン 1 世の娘であるサヴォワ Savoy 公未亡人マルガレーテ Margarete は、甥のカルルが成年に達したので 1515 年にネーデルラント総督の職を退いたが、カルルがスペイン王国を統合するため 1517 年にネーデルラントを後にして以来、再び総督として、彼女が育てた甥カルル 5 世の軍事費の捻出に盡力した。彼女は 1529 年夏に一万名の兵士の給養及び装備費として四半期に 209,514 グルデンを計上した。フガー、ヴェルザー及びヘルヴァルトの 3 社は彼女との協定で 8 月 15 日及び 25 日に皇帝軍に対し 106,000 金グルデンを支払うことになったが、それより前 7 月 20 日に 3 社にはイタリアに遠征する軍隊に対し 41,000 金グルデンの支払いが予定された。しかし彼女は一方においてスランス国王フランソワ 1 世の母后ルィーズ・ド・サヴォワ Louise de Savoie と 1529 年 8 月にカンブレーで有名な「貴婦人の平和」, „Damenfriede“ を結んだ。この和議の内容は 1526 年のマドリー平和条約の再確認であり、身代金残額 80 万エキュ・ソル *escus sol* が皇帝の手に入ることになったが、勿論直ぐ入手できる筈はなく、ハープスブルク家にとってフガー社は不可欠であった。皇帝カルルはイタリアに上陸して戦いを続けるた

め、国王フェルディナントはトルコを撃退するため、是非ともアントンを必要とした。「フェルディナントは1529年8月12日のフガー宛てのリンツからの手紙において、差し迫ったトルコの脅威を指摘して、アイテル・エック・フォン・ライシャハ Eitel Eck von Reischach の軍隊とヴェルテンブルクの騎兵のために前貸しを求めた。それと並行して、3千名の傭兵と2百頭の装備した馬のためハル支店から14,000 グルデンを得ようとするオルテンブルクの努力が続いた。更にフガーはイタリアの軍隊に武器、船、橋、給養及び金を支度しなくてはならなかった。」¹⁾

1) G.v. Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S. 502–503.

アントンの兄ライムントは一族の最年長者として名誉職に満足して、商売は弟に任せて、古代の碑銘と書物の収集と狩猟を楽しんだが、叔母ズィビレとの衝突の際に見せたように、癪癪の余りに我を忘れて節度を失う気質は改まらなかった。1529年夏にフガー家の長ともあろう者が、取るに足らぬことで実力を行使するという事件が生じた。ランゲンノイフナハ Langenneufnach の一農民がマテーウス・エーエム Matthäus Öhem に不当に拘禁されたが、エーエムは曾て追跡されたランゲンマルテルを匿った新教徒であり、彼に対して偏見を抱いていたライムントは農民の身内に頼まれて、拘禁されている農民を救ってやろうと思った。こうして彼は仲間の者と8月24日の夜遅く、武装してエーエムの家を襲って農民を解放してやったが、それは古い自力自衛権を行使してラント和平を破ることになった。フガー家の反対者は参事会に提訴し、ライムントを捕えるため250名の武装者と2門の砲が準備された。当時国王の借款についてフガー社と交渉中のオルテンブルク伯、会計長官レーブレ及び顧問官ツォットが、この件で帝国都市当局を訪れて、ライムントのために仲介を計った。この突発事件を冷静に判断したアントンは8月31日に自分で兄を伴って参事会に赴いた。ライムントはゲギンゲン

Göggingen の市の監獄に 9 月 4 日まで拘禁され、百グルデンの賠償を支払った他に、アウクスブルク市に対して煉瓦を 10 車出さなくてはならなかった。

1529 年 9 月 4 日に国王フェルディナントはリンツから顧問官ヨハン・ツォットに対して、フガー及びパウムガルトナー両社からペーメン、ラウズィッツ又はイドリアの抵当で高額 of 貸付を受けることを委託した。ティロール政府は 9 月 15 日にクラウゼンの鉱山判事に指令して、支配人ゲオルク・ヘルマンとの契約に応じてフガー社のクラウゼンの鉱石倉庫を拡張させて、好意を示した。フガー及びパウムガルトナー両社が国王に貸付けた 15,000 グルデンに対し、フェルディナントは 9 月 25 日にリンツでラウズィッツの収入を指定した。同日両社は「特にトルコ人に対抗するために」鑄貨で 28,500 グルデンを国王に無利子で貸したので、国王は両社とシュヴァーツの 12,000 マルクの銀買契約を結んだ²⁾。10 月 8 日にフガー社はトルコ戦争のためのティロール歩兵に対し 1,000 金クローネン (=1,400 グルデン) を支払った。

2) G.v.Pölnitz, *Anton Fugger*, 1. Bd., S.505.

1529 年 10 月 2 日にアントンはアウクスブルクから、ハンガリアとズィーベンビュルゲンにおける彼の企業に対する保護を訴える書翰をポーランドの国王ズィグムント及び宰相、副宰相たちに送った。彼の真意はポーランドの仲介によって、トルコの援助を受けているサポヤイから彼の企業に対する保護を受けることにあった。フガー家の資金で編成されたフェルディナントの軍隊によってハンガリアから追われたサポヤイは義弟のポーランド国王の許に逃れていたが、ポーランドの宮中伯ヒエロニムス・ラスキ Hieronymus Laski はサポヤイを熱烈に支持し、フランス大使とともに彼にスルターンの庇護下に身を置くように勧め、今やシュレイマン 2 世のウィーン攻撃に際しサポヤイはトルコ軍の庇護の下にハンガリアに復帰でき、慄え上がったハンガリアは彼を受け容れた。アントンの命を受けたクラカウ支店長ヘーゲルはポー

ランド向けハンガリア銅輸出のサポヤイの承認を、ラスキを通じ申請した。新ハンガリア国王サポヤイは1529年11月1日付でフガー社のハンガリア鉱山賃借の継続を認めることを声明し、フガー家は決定的な成果を達成した。

1529年末にアウクスブルクで粟粒疹が流行したので、アントンは市を離れてカウフボイレン Kaufbeuren から業務を指揮した。フガー社から貸付を受けるためにカウフボイレンを訪れた国王顧問ツォットは12月6日に彼の努力が失敗したことをフェルディナントに報告しなくてはならなかった。国王がハンガリアの奪回に成功する迄はフガー社からの大口貸付は期待できないように見えた。1529年10月半ばトルコ軍がヴィーンの包囲を解いて退却して以来、西欧諸国の危機感は薄らいだので、ネーデルラントの十字軍税や諸国の援助金も余り当てにならなかった。しかしフェルディナントにとってアントンと提携する以外に、財政難を解決する道はなかった。彼はフガー、パウムガルトナー及びピメルの諸社から8万グルデンを入手しようと思った。1529年12月末以来、国王の会計役レーブレはフガー及びパウムガルトナーと五万グルデン借款について交渉した。会談は年内にはまとまらなかった、というのは商人たちは信用できる担保を要求したのみでなく、織物や銀器の引渡しをこの契約に組み入れようとしたからであった。

カルル5世は1517年以降1529年迄主にスペインで過ごして、一切の軍事活動を直接に行なわなかったのは、スペイン国内における支配権を確立するためであった。しかし1529年以降、皇帝は積極的な活動を開始した。この年の6月29日皇帝はバルセローナ Barcelona 条約を結んで教皇と和解しクレメンス7世はカルル5世の戴冠を認める約束をした。7月29日カルルはバルセローナを出帆して2週間後にジェーノヴァ Genova に上陸し、12月6日にボローニャ Bologna に入城した。すでにボローニャに来ていた教皇と皇帝とは隣り合わせに宿舎を取り、両人の部屋は秘密の戸で連絡されていた。皇帝と教皇はトルコ、ドイツ新教徒及びフランスに対する対策を協議した。

1529年のシュパイエル帝国議会において、多数を占めた旧教徒派等族の

決議した最終決定に対し、福音派等族が抗議したことから、新教徒に対するプロテスタントの名称が生じたことに象徴されるように、ドイツの宗教改革は特殊ドイツ的な領邦的特徴を強く現わして来た。スイスではツヴィングリ Zwingli の影響が急速に拡大した。ヘセン方伯フィリップは 1529 年 10 月にルターとツヴィングリを彼のマールブルク Marburg の居城で会見させてプロテスタント勢力の統一を計ったが、両人は聖餐説に関する自説を譲らず、フィリップ方伯の意図は失敗に終わった。

アントンは 1529 年に 36 才になっていた。4 年間の業務指揮は彼に十分に企業内容を知悉させた。彼は忠実なカトリック教徒として、宗教改革には断乎とした態度を保った。しかし彼は決して頑迷ではなかった。エラスムス Erasmus が宗教改革の嵐で騒然となったバーゼルの町を 1529 年 4 月に去った時、アントンは彼をアウクスブルクに招待したが、健康状態を理由に拒わられたのに、再度彼の移住を 1529 年夏に勧めたのは、アントンの視野の広さを示すものと云えよう。この招聘も今住んでいるフライブルク Freiburg の方が平安であると考えたエラスムスによって丁重に謝絶されたが、エラスムスはアントンを学問の保護者として賞讃し、アントンが子弟の教育を重視したことに「この大商人の立派な精神は明らかだ」と述べた³⁾。

3) G.v.Pölnitz, *Anton Fugger*, 1, Bd., S.501,